

Vol. 181

CONTENTS

【コラム】情報教育課程の設計指針の改訂とAI利活用の潮流…徳山 豪

【解説】「高校教員向けワークショップ：情報教育や情報技術を活用した問題解決・探究学習推進のヒント」開催報告…遠山 紗矢香・田崎 丈晴・井手 広康

【解説】第88回全国大会イベント企画：新課程「情報入試」—2年目の共通テストと広がる個別入試—…谷 聖一



COLUMN

情報教育課程の設計指針の改訂とAI利活用の潮流

日本学術会議の情報学教育分科会による「情報教育課程の設計指針—初等教育から高等教育まで（第2版）」が2026年5月に公開された。本会のWebサイトでも、情報処理教育委員会委員長名で紹介されている^{☆1}。

詳しい内容は本誌で紹介されているが^{☆2}，第2版での大きな改訂は，人工知能（AI）の教育課程の新規カテゴリーとしての記載と，デザイン思考に関する項目の追加，データサイエンスの項目の拡充である。新聞等での報道でも，AI教育の新規カテゴリーが注目されている。特に，AIやデータを利活用するための基盤や実践の教育と，情報社会に関する倫理教育に重点が置かれている。これは，すべての学術の基盤，さらには市民生活の基盤としての情報学の立場を重要視したものであり，AI利活用の日常化に備えるものである。

さて，同じく5月に，OpenAI社が，「エルデシュの単位距離問題」という数学の未解決著名問題をAIが解いたと発表して世間を驚かせた。筆者もこの問題が大好きで，教科書で「恐るべき難問」と紹介している^{☆3}。エルデシュが1946年に提出し，多くの数学者が正しいだろうと考えていた予想について，AIは学術性の高い驚くべき解法を考案し反証したという。

プリンストン大学のNoga Alon教授による解説講演では，「このAIは，ネット上の論文を網羅して広範囲の数学分野に精通し，超人的な忍耐力と計算力を持つ」と評されていた。実際，多岐にわたる数学分野の専門的な手法や研究成果が利用されており，これらを使いこなし，組み立ててエレガントに解明できると見通す能力は想像を絶する。囲碁AIのAlphaZeroは，「不死身のAI名人」たちが切磋琢磨する強化学習によって人間を凌駕する。数学の世界でも，ガウスやオイラーが老いても疲れもせずに研鑽を続けたら，と連想してしまう。

Alon教授は，「今後，AIを使いこなせないと，トップレベルの数学成果を上げられなくなる」と予見している。学術や産業においてAIを自在に使うことが必須になるという潮流において，「最後の砦」の数学も例外ではなくなったということである。

この潮流の中で，情報学の教育の重要度はさらに増している。日本学術会議情報学教育分科会と本会は連携して，この重要な情報教育の先導を担い，今後も情報教育の設計指針を改訂し，また，それに沿った教育を行う教育体制の改善に向けた努力を続ける。

☆1 <https://www.ipsj.or.jp/annai/committee/education/edu20260513.html>

☆2 <https://note.com/ipsj/n/n68f1e26bcd8b>

☆3 工学基礎：離散数学とその応用，第2版，数理工学社，7.2.4節「同じ距離は何回でてくるか」



徳山 豪（東北大学／関西学院大学）（正会員）tokuyama.takeshi@gmail.com

1985年東京大学博士課程修了，理学博士。日本IBM東京基礎研究所研究員，東北大学教授，関西学院大学教授を歴任。日本学術会議情報学教育分科会副委員長。計算理論と離散数学を専門とする。

LOGOTYPE DESIGN...Megumi Nakata

「高校教員向けワークショップ： 情報教育や情報技術を活用した問題解決・探究 学習推進のヒント」開催報告

遠山紗矢香 田崎丈晴 井手広康
静岡大学 静岡大学 東京学芸大学

ワークショップ企画経緯

□ ワークショップについて

静岡大学情報学部では2025年度より、情報教育研究センター設立準備ワーキンググループ(WG)にて「情報教育研究センター」の設立に向けて活動している。本稿では同WG設立に際して開催した「高校教員向けワークショップ：情報教育や情報技術を活用した問題解決・探究学習推進のヒント」(以下WSと呼ぶ)について報告する。同WSには全国から43名の高校の先生方にご参加いただいた。また、静岡大学情報学部教員12名も参加し、より良い探究学習の推進について議論を行った。なお、田崎・遠山は同WG構成員として本稿全体を執筆・調整した。井手は同イベント参加者としての立場から「参加者の声」の取りまとめを担当した。

□ ワークショップ概要

本WSは2026年2月23日(月祝)にJR浜松駅直結のアクティシティ浜松コンgresセンター41会議室で開催した。参加費は無料であった。本イベント全体の講師は、前文部科学省教科調査官(高等学校情報科)であり同WG構成員でもある田崎が務めた。

本WSの趣旨は、高等学校で情報教育を担当する先生方、ならびに情報技術を活用した問題解決や探究学習、「課題研究」等を担当する先生方と共により良い情報教育について議論する機会を設けることであった。「情報教育」は広義でもあるため、教科「情

報」の先生に閉じることなく、情報技術を活用した学習活動の指導に携わられている先生方も対象とした。もちろん、工業・商業等の専門高校や教育行政機関に所属する方々も参加可能とした。

本WSは、大学近隣の高等学校との連携強化を念頭に置くと同時に、全国の高等学校において情報教育に携わっておられる先生方とのさらなる交流を行うことを目指して開催した。このため、静岡県内の高等学校には案内を郵送し、全国の高等学校に対してはWebサイトやSNS等で周知を行った。参加された先生方のご所属先都道府県としては、約35%が静岡県、約30%が愛知県であった。全体としては全国10都道府県からご参加いただいた。

事前参加登録時のアンケートにおいて、WSの内容を検討するために、「現在授業や運営等を担当されているものをすべてチェックしてください」という質問を行った。回答の選択肢は、情報I、情報II、総合的な探究の時間、課題研究、授業外での探究的な学習、その他、とし、複数選択可とした。回答の内訳を図-1に示す。また、この質問に続けて「先に選択したもののうち、主担当となっているものを1つ選択してください」という質問も行った。これに対する回答を図-2に示す。

図-1および図-2の結果より、情報Iと探究学習について担当されている先生方が多かった。このうち情報Iを主担当とする先生方が多数派だった。一方で図-1から分かるとおり、専門高校で開設されている課題研究を担当されている先生方もいた。こ

これらの結果を踏まえて、情報Ⅰと探究的な学びに広くまたがる形でWSの内容を構成することとした。

□ ワークショップの構成

WSの趣旨を具体化する上で重視したのが、高校と大学とが共に同じ方向を向いて活動をし始めるための場として機能させることだった。そのためには、高校の先生方と大学教員が、それぞれの立場で持ち帰ることができる新たな知見が生じるように場づくりをする必要があった。そこで、高校の先生方については、先生方同士が所属校や担当教科・学年を超えて、日頃の悩みも含めて語り合う機会を設けることが有効だと考えられた。さらに、多くの先生方が問題発見・解決学習や探究学習の課題だと認識されている点の解決に資するべく、それら課題解決と関連する「問い」への答えを考えていただく形式とした。大学教員はその協議に参加させていただくことで、高校の先生方がどのようなことに課題感を持たれて

おり、その課題感はどのような制約・事情から起因するのかを学び、大学として何ができるかを検討する機会とした。

問いに対する答えを考える上では情報が必要である。そこで、上記の対話に先んじて、情報技術を活用した問題発見・解決学習や探究学習で話題になることの多いキーワードに関連したミニ講義を行うこととした。キーワードは次のものとした。

- ① データから理解するスポーツ、スポーツと情報
- ② 写真や映像の理解、AIを用いた画像認識
- ③ インタビュー調査、社会調査

静岡大学情報学部は設立当初より「文工融合」を謳っており^{☆1}、上記のそれぞれについて講義することができる教員が揃っている。このため、①、②、③それぞれについて情報学部教員がミニ講義を行うこととした。WS当日のプログラムを表-1のとおりとした。

ミニ講義の内容

□ ミニ講義①データから理解するスポーツ、スポーツと情報(市川 淳 助教)

ミニ講義①では、身体性認知科学・スポーツ情報学の視点から、集団スポーツを用いたチームワークについての研究例が紹介された。研究の目的は、チームのパフォーマンス向上に至るプロセスを定量的に示すことであった。実験は3-on-3バスケットボールのフィールド実験として行われた。普段からともにプレーすることによって戦術について「チームメンタルモデル」^{☆2 1)}が基盤化されているであろう状態から、メンバーの1名を交代させることで、初めて共にプレーする選手を含むチーム構成に変更した。変更後のチームで試合を行ったところ、選手交代直後は選手間の齟齬によりパフォーマンスが低下する傾向が見られたが、試合数を重ねることで齟

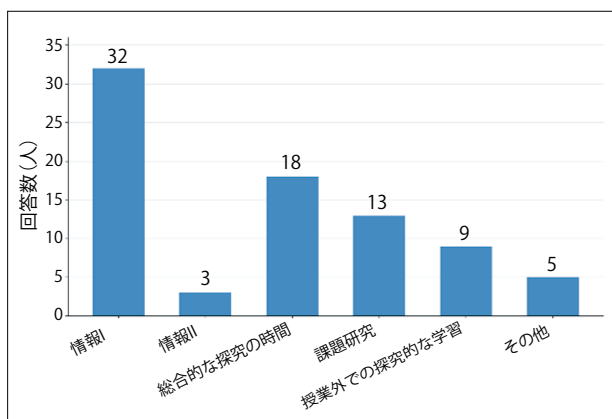


図-1 参加者が所属先で担当していることの内訳(複数選択可)

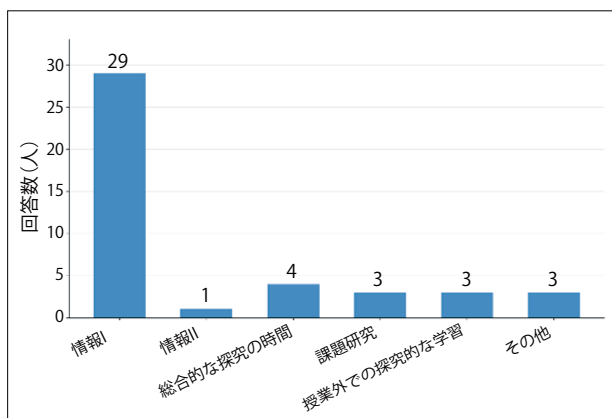


図-2 参加者が所属先で主担当を務める科目等

☆1 <https://www.inf.shizuoka.ac.jp/feature/>

☆2 チームのメンバー間で課題や状況、互いの役割等についての各メンバーの理解が収束している状態。



齟齬が解消され、パフォーマンスが回復する傾向が身体運動のデータ分析結果から示唆された。故に、チームメンタルモデルとパフォーマンスは関連しており、パフォーマンス低下を防ぐ鍵はチームメンタルモデルの再基盤化である可能性が示された。

市川氏から高等学校で生徒が探究学習を行う場合の助言として、スポーツのデータ分析は自由度が高い分迷いやすいため、指導者による足場かけを行うことが重要であること、サイエンスをする観点では、根拠やプロセスの理解につながる探究を行うことが好ましく、そのためには結果のデータだけよりもプロセスのログを取って分析することも方法の1つとして考えられることが共有された。

□ ミニ講義②写真や映像の理解, AI を用いた画像認識(新村文郷 助教)

ミニ講義②では、画像に写るものが何かをコンピュータを通して識別させる方法を構築・開発することが画像認識の研究であることが紹介された。その具体例として、人が歩く様子をデータとした画像認識を用いて「歩きスマホ」を高い精度で認識するための研究が紹介された。

研究で最初に着手すべきは先行研究を調べることだと説明された。その上で本研究では、歩行者検出

手法と歩行者属性認識手法に特化したサーベイが行われた。結果として顔が下を向き、肘が曲がる姿勢が共起したときに「歩きスマホ」と認識することにしたことが説明された。認識精度を高める過程では、従来手法を頭と肘の組合せだけに注目して処理を行う改良を行い、性能が改善されたことを確認したことが紹介された。また、さらに高い精度を目指すために姿勢推定手法を導入した結果、車載カメラから「歩きスマホ」歩行者の認識を実現できたことが示された。

以上のように、本ミニ講義は関連研究に注目し、試行錯誤しながら認識精度をデータによって評価し改善することを繰り返して成果を得る探究過程を示すものだった。

□ ミニ講義③インタビュー調査, 社会調査(笹原 恵 教授)

ミニ講義③では社会調査の中でも特に質的調査であるインタビュー調査について詳しく説明された。最初に、社会調査は一定の社会または社会集団における社会事象について研究するものであり、実証的にデータを収集したり、直接現地で情報を収集したりすることを通じて、人々が考えていることを明らかにすることであると説明された。この際、調査す

表-1 WS 当日のプログラム

12:30～13:00	受付
13:00～13:05	開会挨拶 (小西達裕 情報学部長/教授)
13:05～13:15	趣旨説明 (遠山紗矢香 准教授)
13:15～13:35	情報学部教員による問題解決・探究学習推進のヒント①: データから理解するスポーツ, スポーツと情報 (市川 淳 助教)・質疑応答
13:35～13:55	情報学部教員による問題解決・探究学習推進のヒント②: 写真や映像の理解, AI を用いた画像認識 (新村文郷 助教)・質疑応答
13:55～14:10	休憩
14:10～14:30	情報学部教員による問題解決・探究学習推進のヒント③: インタビュー調査, 社会調査 (笹原 恵 教授)・質疑応答
14:30～14:35	配置換え
14:35～14:55	グループ協議①: 参加者同士での意見交流・情報交換
14:55～15:10	グループ協議①のクロストーク
15:10～15:25	休憩・配置換え
15:25～15:45	グループ協議②: 参加者同士での意見交流・情報交換
15:45～16:00	グループ協議②のクロストーク
16:00～16:10	大学からのフィードバック (田崎文晴 特任教授)
16:10～16:15	閉会挨拶 (竹内勇剛 情報教育研究センター設立準備 WG 長/教授)

る立場と調査される立場は対等であり、調査を通じてほかの人々と社会関係を取り結ぶことの重要性が示された。具体的な方法として大きく量的調査と質的調査に分かれ、目的に応じて使い分けるが、取り上げる社会事象については併用することもあることが示された。また、調査テーマの設定では、自分たちの身の回りから関心のある領域を定め、問いを立てることは大学生にとっても容易ではないため、問いを絞り込むためには教員等との対話が重要であることが示された。

インタビュー調査では、相手や状況に応じて柔軟に質問を組み立てることができる利点があるが、その利点を活かすためにはインタビュアーが調査に先立って問題意識を持つことが必要だと説明された。質問では、相手が答えやすいテーマや問いを設定することが重要であることが示された。また、相手が言おうとしたことをきちんと理解しようと真摯な態度で耳を傾けることは当然だが、相手がどのような意味で話しているのかを聴き取るための共感性も必要であることが強調された。

最後に、社会学的アプローチから情報学にアプローチすることは、人間・社会中心の情報社会をデザインする上で重要であること、社会調査はその意味において、1つの情報技術であると言える、とまとめられた。

参加者の反応

□ アンケート結果

参加者43名のうち30名から事後アンケートの回答を得た。イベント全体の満足度は「大変満足した」が73%、「まあ満足した」が27%であり、全員が肯定的な回答であったことから、一定の期待に応えることができたと考えられる。ミニ講義について、満足度は「大変満足した」「満足した」が合わせて97%を占めた。また時間の長さは77%が「適切」、13%が「やや短い」、10%が「やや長い」と回答した。ミニ講義は参加者の期待に応える内容だったと考え

られる。また、後半のグループ協議について、満足度は「大変満足した」「満足した」が合わせて94%を占めた。また時間の長さは53%が「適切」、44%が「やや短い」「短い」、3%が「やや長い」と回答した（「長い」は0%）。グループ協議における時間確保が今後の課題である。また、本WSの案内は静岡県内のすべての高校へ郵送したが、参加者がWSを知った経緯は「関係者・知人から聞いた」が53%、「教科部会等でのメール案内」が23%、「郵送案内」が10%であった。より広範な先生方へリーチするための経路を開拓することも今後の課題である。

□ 参加者の声

事後アンケートでは、「今後のイベントで取り上げてほしいテーマなど」という自由記述欄を設けた。その回答からは、WSに対する肯定的な意見に加え、今後の改善につながる示唆も多く寄せられた。特に、グループ協議に関する意見が多く見られた。以下、その代表的な記述を示す（内容を変えない範囲で、一部表現を整えている）。

- 参加者の中には、データ分析の実践例について紹介された先生もいたので、各学校で情報技術をどのように活用しているかを共有する場面があると、さらに議論が深まったように思う。
- 実習的な活動も含めた、もう少し長い時間の講義が受けられるとうれしい。また、グループ協議でほかのグループを見て回る時間がもう少し取れるとありがたかった。
- 現場でもよくありそうな事例だったので、大学の先生であれば、この事例に対してどのような視点から支援や声掛けを行うのかを伺いたかった。

これらの意見から、グループ協議は参加者同士の情報交換や大学教員との交流の場として高く評価されていたことが分かる。一方で、協議時間の充実や実践事例の共有、大学教員からの具体的な助言など、今後のWS運営に向けた改善点も示された。

また、探究活動そのものに関する意見も多く寄せられた。以下、その代表的な記述を示す。



- 目指すべき探究活動のイメージを持つことができたが、参加者の話を聞いていると、探究活動をどのように進めていくかが主な話題になっていた。
- グループワーク①での探究活動は、「総合的な探究の時間」を想定したものなのか「情報」を想定したものなのか、あるいは「情報」以外の各教科も含めてなのかによって、参加者の捉え方に違いが見られたことが印象的であった。
- 探究活動を進めていこうとしている学校も増えている印象がある。大学進学のために探究活動をするだけではなく、生徒が心から探究したいと思えるテーマに取り組める機会をどのようにつくっていくかについて、また皆様と一緒に議論できれば幸いである。
- 情報科の教員は各学校において大抵1人で格闘している。今回のWSでは、静岡大学をはじめ多くの先生方と交流することができ、このような貴重な機会を提供していただき感謝している。

これらの意見から、参加者は探究活動に対して高い関心を持ちつつも、その位置付けや進め方については学校や担当教科によって認識が異なることがうかがえた。また、情報科教員同士や大学教員との交流を通して、多様な実践や考え方に触れる機会が求められていることも明らかとなった。今回のWSでは、情報科教員だけでなく、他教科の教員にも参加いただいたことで、多様な視点から探究活動について議論を深めることができた。

今回の取り組みは、静岡大学情報学部情報教育研究センター設立準備WGによって開催され、参加

した先生方にとって有意義な学びと交流の機会となった。情報教育研究センターの設立準備段階において、本WSのような取組が実施されたことは、高校と大学との連携体制を構築する上で重要な意義を持つものと考えられる。今後もこのような取り組みが継続的に開催され、高校と大学が連携しながら、情報教育や探究活動に関する議論を深める場として発展していくことを期待したい。また、本WSを契機として、高校と大学との連携が一層進み、情報教育および探究活動のさらなる充実につながることを、本WSの参加者の1人として心から期待している。

参考文献

- 1) Steiner, S., Macquet, A.-C. and Seiler, R.: An Integrative Perspective on Interpersonal Coordination in Interactive Team Sports, *Front., Psychol.*, 8:1440, doi:10.3389/fpsyg.2017.01440
(2026年7月30日受付)



遠山紗矢香（正会員） tohyama@inf.shizuoka.ac.jp

静岡大学情報学部准教授。博士（認知科学）。本会では理事（教育・会誌）、ダイバーシティ委員会委員長、情報教育シンポジウム SSS2023 プログラム委員長ほかを担当。



田崎文晴（正会員） tasaki@inf.shizuoka.ac.jp

静岡大学情報学部情報教育研究センター設立準備WG 特任教授。修士（工学）。本会では情報科教員・研修委員会幹事ほかを担当。本会2026年度アドバイザリ・ボード。



井手広康（正会員） idehiro@u-gakugei.ac.jp

東京学芸大学教育学部講師。博士（情報科学）。専門は情報科教育と麻雀教育。本会では、情報処理教育委員会幹事、初等中等教育委員会副委員長、情報科教員・研修委員会委員を担当。

第 88 回全国大会イベント企画:新課程「情報入試」 — 2 年目の共通テストと広がる個別入試 —

谷 聖一

日本大学 文理学部

イベント企画の概要

2025 年度入学者選抜から大学入学共通テスト(以下, 共通テスト)に高校教科「情報」が導入され, 2 年目となる 2026 年度入試では約 30 万人が「情報 I」を受験した。各大学の個別学力検査(以下, 個別入試)で「情報」を出題する大学も着実に広がりつつある。情報入試委員会では昨年の本会第 87 回全国大会での企画¹⁾に続き, 本会第 88 回全国大会において情報入試に関するセッションを企画し, 共通テストでの「情報」の出題がどのように変わり, 個別入試で「情報」の出題がどのように広がっているのか, 新課程「情報入試」の 2 年目を振り返った。

文部科学省・大学入試センター・大学それぞれの立場からの講演 6 件と, 高校教員を招いたパネル討論を通じ, 出題の意図と結果, 個別入試導入の狙いと成果, そして高校現場で起きている変化を共有した。会場・オンライン合わせて 200 名近くが参加した。

プログラム

2026 年 3 月 8 日当日のプログラムを次に示す。

- 9:30 ~ 9:35: オープニング
萩谷昌己氏(東京大学 名誉教授/本会会長)
- 9:35 ~ 9:50: 講演(1) 現行の学習指導要領における情報科の学習内容について
須藤祥代氏(国立教育政策研究所 教育課程調査官/文部科学省 教科調査官)
- 9:50 ~ 10:05: 講演(2) 2 年目の大学入学共通

テスト『情報 I』~ 2 回の試験問題に込めた意図~
水野修治氏(大学入試センター 試験問題調査官)

- 10:05 ~ 10:20: 講演(3) 松山大学 情報入試導入に向けて
小林真也氏(松山大学 情報学部 教授)
- 10:20 ~ 10:35: 講演(4) 高知工科大学における「情報」入試を実施して
松崎公紀氏(高知工科大学 情報学群・データ & イノベーション学群 教授)
- 10:35 ~ 10:50: 講演(5) 個別学力検査への「情報」導入の成果と今後
井上智生氏(広島市立大学 大学院情報科学研究科 教授)
- 10:50 ~ 11:05: 講演(6) 立命館大学における情報入試の導入について~ 2026 年度一般入試~
島田伸敬氏(立命館大学 情報理工学部 教授)
- 11:10 ~ 11:55: パネル討論
進行: 安田 豊氏(京都産業大学 情報理工学部 准教授), パネリスト: 太田重成氏(岡山県立岡山操山高等学校 教諭), 古田賢司氏(愛媛県立東温高等学校 教諭)
- 11:55 ~ 12:00: クロージング
赤澤紀子氏(電気通信大学 特任准教授/本会理事(教育担当))
司会は谷聖一(日本大学/本会情報入試委員会 委員長)が務めた。

オープニング

冒頭, 本会会長の萩谷氏より開会挨拶が行われた。



萩谷氏は、「情報」は、情報技術に関する知識、社会制度や倫理を含む多角的な視点、情報技術の活用のための思考力・判断力・表現力、そしてより汎用的な問題解決能力を1科目で測ることのできる「非常にお得な科目」ではないかと述べ、この「お得感」に気づき、「情報」を出題する大学が今後さらに増えていくことへの期待を述べた。

講演(1) 国立教育政策研究所・文部科学省：学習指導要領が目指す情報科の学び

情報入試の前提となる高等学校での学びについて、須藤氏より、現行学習指導要領の考え方と情報科における授業改善の在り方が解説された。現行学習指導要領は、「何を学ぶのか」だけでなく「その内容を学ぶことで何ができるようになるのか」という資質・能力を3つの柱で整理して示しており、2年目の共通テストの問題にもその姿勢が表れていると指摘された。

講演の中心は、現場から「抽象的で分かりにくい」との指摘もある「深い学び」であった。情報科の見方・考え方を働かせ、生徒が「なるほど」「気付いた」と夢中になる姿がヒントになるといい、クラウドを介して即時にフィードバックを共有するプログラム制作の中間レビュー会や、ネットワーク構成図の作成から実機によるネットワーク構築へと展開する「デジタルとリアルなベストミックス」など、デジタル学習基盤を活用した「情報I」の授業実践が紹介さ



図-1 須藤祥代氏の資料の一部

れた(図-1)。また、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、1コマ単位ではなく単元というまとまりで授業を設計することが提案され、授業改善に「これが正解」というものではなく、生徒に「任せる」のではなく「委ねる」という視点が大事だと締めくくられた。

講演(2) 大学入試センター：2回の共通テスト「情報I」に込めた意図

共通テストの実施機関である大学入試センターの水野氏より、2回の試験の結果と出題意図が解説された。初年度(2025年度)の「情報I」は受験者279,718名・平均点69.26点と他教科に比べ高めであったが、初年度としてはむしろ好意的に受け止められ、本会も協力した外部評価でも試験問題の方向性は「今後もこのような問題を作成していくことを強く期待している」と評価された。2年目(2026年度)は受験者305,202名・平均点56.59点で「難化」と言われたが、他教科の平均点とほぼ同程度であり、共通テストとして適正で決して難しい試験ではなかったとの見解が示された。得点分布は初年度より中央に寄り、成績上位層においてより選抜試験として機能した可能性があるという(図-2)。

2年目の本試験については、高校生に身近な画像の透過処理が「情報I」で学ぶビットの論理演算で説明できることを扱った問題や、桜の開花日予測を題

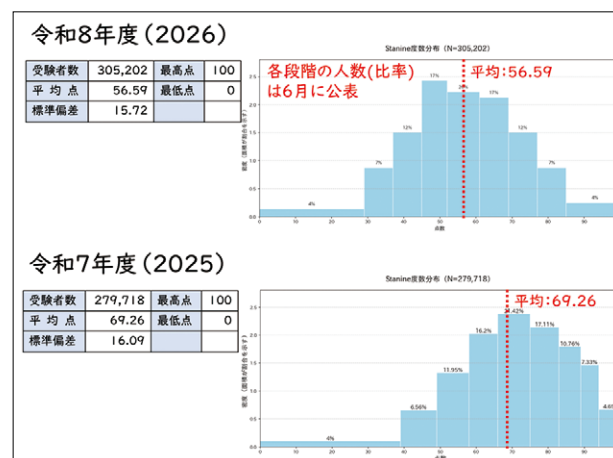


図-2 水野修治氏の資料の一部

材に探究の過程を問題の中で4回繰り返す第4問など、出題の意図が具体的に紹介された。最後に、講演時点では2026年6月末頃に公表予定とされていた設問別正答率について、共通テスト対策というより日頃の高校の授業を見直すきっかけになるとの見方が示され、この試験を何十年も持続していくために、大学教員の作問委員としての協力が呼びかけられた。

講演(3) 松山大学：地域の大学として取り組む情報入試導入

2027年度入学者選抜(2026年度実施)からの個別「情報」入試導入を控えた松山大学の小林氏より、導入の意義が語られた(講演内容は個人的見解であるとの断りがあった)。同学は2025年4月に文理融合型の情報学部を新設し、共通テスト利用選抜では薬学部を除く全学部ですでに「情報I」を選択可能としている。個別入試では一般入試II期日程の5学部(経済・経営・人文・法・情報)で「情報」を導入し、文系学部の受験生も個別

「情報」入試で受験できる。共通テスト利用と合わせた「情報」受験可能な募集人数は、学力試験を課す入学定員の8割を超える(図-3)。

導入の意義として小林氏は、入学者に高校で「情報」を学んできてほしいという思いと、卒業生の多くが地元で活躍する大学として県下の高校で「情

共通テスト「情報I」及び個別「情報」テストの利用							
「情報」受験可能な募集人数と学力試験を課す入学定員に対する割合(薬学部を除く)							
	入学定員	学力試験を課す入学定員	「情報」受験可能な募集人数				利用割合
			共通利用前期日程	共通利用後期日程	一般II期	小計	
経済学部	400	174	45	10	99	154	88.51%
経営学部	340	125	25	5	75	105	84.00%
人文学部	235	120	27	5	58	90	75.00%
法学部	215	100	25	5	55	85	85.00%
情報学部	120	60	15	5	20	40	66.66%
小計	1410	579	137	30	307	474	81.87%

2027年度入学者選抜試験(2026年度実施)の募集人数で作成。
「学力試験を課す入学定員」とは、学力試験のみで選抜を行う定員であり、総合型選抜や学校推薦型選抜などの面接、小論文、出願書類等を含み判定に取り入れた選抜定員を除いた定員
注意：この情報の正確性についていかなる保証もありません。詳細は松山大学入学募集要項を御確認ください。

図-3 小林真也氏の資料の一部

報」の授業に力を入れてもらう働き掛けの1つになることへの期待を挙げた。また、「情報」入試で見たい能力として、言語能力(Language Arts)、論理的思考(Logical Thinking)、数値データの読解・分析能力(Numeracy)、グラフ・図の読解・分析力(Graphicacy)の4つを示した。

講演(4) 高知工科大学：選択科目としての「情報」初出題とその結果

高知工科大学として最初の一般入試での「情報」出題(講演の約10日前に実施)について、松崎氏より報告された。同学は2019年からAO入試に「プログラミング」を導入するなど情報入試に先行して取り組んでおり、2024年12月に出題を公表し、2026年2月、情報学群とデータ&イノベーション学群の2学群で、理科等の選択科目に「情報」を追加する形で最初の出題を実施した(配点は個別合計400点中200点)。出題は大問3問で、大問1では基礎知識・用語とプログラムのトレースを、大問2では論理回路を、大問3ではゲーム(ニム)を題材に状態の列挙と遷移関係から勝敗を判定させる問題を出題した。特に大問2・3では論理的思考力を問うことを事前に予告していた。

選択状況は予想を大きく上回り、情報学群で54%、データ&イノベーション学群で71%の受験者が「情報」を選択した(図-4)。全体の得点率は適当であったが、大問別の得点率は予想に反していた。特に、フラッシュメモリを用いた補助記憶装

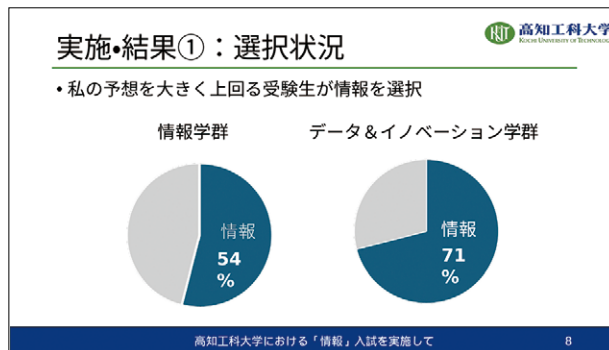


図-4 松崎公紀氏の資料の一部



置名(英文字3文字、答は「SSD」)を答えさせる問題の正答率が35%にとどまるなど基礎知識の定着に課題が見られた。今の受験生は手を動かす作業はよくこなす一方、与えられた規則を理解し情報を整理しながら展開していく力に課題があると総括された。

講演(5) 広島市立大学:「情報」1科目必須・高配点入試の成果

2025年度から一般選抜後期日程の個別学力検査に「情報」を導入した広島市立大学の井上氏より、初年度の実施結果と入学後の学生の成績が報告された。後期日程では、個別学力検査として「情報(情報I)」1科目300点を必須とし、共通テストの「情報」200点と合わせて、総合点900点中500点(56%)を「情報」が占める思い切った設計である。従来の個別「数学」では「数学で点を稼げるから」という受験生が多かったことから、「情報を学びたい・得意にしたい」学生の確実な獲得を狙った。

初年度は出願倍率17.6倍・実質倍率5.9倍と過去最高となった。情報Iの範囲を確認する出題とした結果、満点獲得者が続出し、合格者の得点は平均282点・最低250点(300点満点)となった。入学後の1年次成績の調査では、情報系科目(プログラミングなど)において後期日程入学者の成績が前期日程入学者(個別「数学」)に比べ有意に高いという結果が得られた(図-5)。広島県教育委員会と共催の地

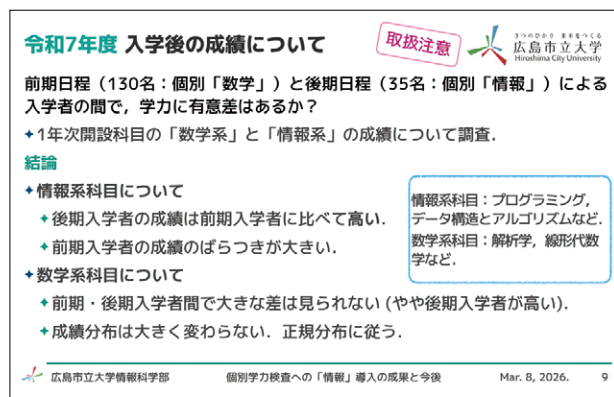


図-5 井上智生氏の資料の一部

元高校生対象「情報I」講座(延べ509名参加)など「試験をやりっぱなしにしない」高大接続の取り組みも紹介され、今後も出題内容を安定させ、高校の教材にしてもらえる良質な問題を目指すとした。

講演(6) 立命館大学:文系学部を中心とする大規模な情報入試

2026年度一般入試から独自出題の「情報」を導入した立命館大学の島田氏より、導入の経緯と実施状況が報告された。同学の情報入試は、学園中期計画が掲げるイノベーション人材育成という全学的な意思決定から始まった。特筆すべきは、記述式の「情報」独自問題を導入した7学部のうち理系は情報理工学部のみで、経営・総合心理・映像・食マネジメント・スポーツ健康科学・デザイン・アートといった文系・学際系の学部が中心である点である(図-6)。島田氏は、「情報は独自のドメインを持たない、ある種の抽象的な学問ともいえ、各学部の専門ドメインを抽象化して扱うことができる。むしろ人文・社会系の学部の方が強く反応した」と分析する。

2025年度入試からの共通テスト併用方式「情報活用型」(7学部、出願1,111名)等を経て、2026年度に学部個別配点方式「情報型(文系/理系)」を新設した。出題は情報Iの範囲で大問4問100点満点(100点満点で出題され、学部・学科ごとに傾斜配点される)、マーク式と記述式を併用し、試験時間は共通テストより

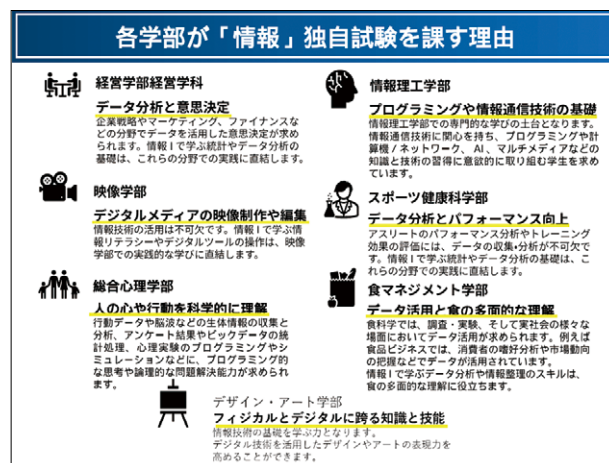


図-6 島田伸敬氏の資料の一部

20分長い80分とし、速く解くことよりも、しっかり理解して正解にたどり着ける力を見る設計とした。2026年2月7日に全国約20の試験地で一斉実施し、「情報型」への出願者は400名を超え、うち4割強が文系学部への出願であった。共通テスト併用等も合わせると情報入試の出願者は約1,000名となる。島田氏は、文系学部で「この入試方式で入学できる」という実績を積み、一般入試における「情報」の入試方式を広めていきたいと結んだ。

パネル討論：高校現場から見た情報入試

パネル討論は、高校の現場で実際に何が起きているのかを高校教員から聞き、大学側と共有することを狙いに、京都産業大学の安田氏の進行で行われた。冒頭、安田氏より、京都産業大学では「情報」を加えた3科目でも合否判定する併願オプション「情報プラス型」の設定日程は受験者が多く、合格者は入学の定着率も高くなりそうで、「大学が望む学生をピックアップして取る」ことができそうだと紹介された。

共通テスト2年目の受け止め：太田氏は、2年目の問題を「これぞ共通テスト情報Iのスタンダード」であり「これを教えることを覚悟しろと高校教員に突きつけられた」問題だと受け止めた。古田氏は、愛媛県内の情報科教員へのアンケートを紹介し、入試導入により「情報」への注目と教員の指導意識が高まり、進路選択で情報系を考える生徒が増えた一方、「入試対策と本当に教えたことが一致しているのか」と自問自答する教員や負担増への不安もあったとした。難易度は「少し難しくなった」が半数近くで、おおむね想定範囲内と受け止められている。

カリキュラムと授業の変化：教科書も共通テスト対策も教えようとすると実習の時間が座学に食われ、「週2コマでは圧倒的に足りない」というのが両氏共通の実感である。SSH等の教育課程特例により「情報」を総合的な探究の時間等に読み替えて単位を減らしていた学校が、入試導入を機に読

み替えをやめる動きも紹介された。授業の工夫として、太田氏は、2年次に「情報I」を2単位で履修し、3年次には夏期・冬期補習やオンラインでの情報提供を行う体制を紹介した(図-7)。また、全単元100本以上の教科書解説動画を自作して予習に充て、授業は実習中心とする実践を紹介した。実習は学習指導要領から発想して設計しており、共通テストで出題されたレシートの分析やフィッツの法則と同じ実習をすでに行っていたという。

教員採用・配置：愛媛・岡山両県とも「情報」専門の採用は始まったばかりで人数は少なく、数学・理科の教員が免許を追加取得して兼担する形が続いてきた。2単位科目では1学年6クラス規模がないと専任1人を配置できないという、配置の構造的な難しさも共有された。

共通テストの問題を巡って：安田氏が主記憶装置・補助記憶装置に関する問題を提示すると、古田氏は「用語と大まかな機能の説明で終始する授業をしていたのでドキッとした」と率直に語り、太田氏は「教員が『なぜ』という疑問の種をまき、みんなで深める授業をどれだけやっているかが測られている。大学入試センターからの挑戦状でありメッセージだ」と受け止めを述べた。安田氏は、基礎的事項の正答率は低い一方でトレースやアルゴリズム解釈の能力は高いというギャップを踏まえ、「システムの設計はデザインチョイスであり、その筋書きを追いつける学びをしてほしい」と大学側からの期待を語った(図-8)。

個別入試導入の難しさ：会場からの個別入試導入

本校の「情報I」への取り組み	
3年生	共通テスト 夏期補習(3~4コマ/クラス) 冬期補習(3~4コマ/クラス) ※Classroomによる情報提供等は継続
	2年生
	2単位(週2コマ) 年間実授業数 約50コマ [50分授業] ※夏期・冬期・春期補習は無し
1年生	授業なし

図-7 太田重成氏の資料の一部



の難しさに関する質問に、安田氏は選択科目として入れる形なら大学側の痛みはほぼなく、あとはコストと出題ミスも含めたリスクの問題であり、「いいことが起きるという事例を広報し、学内で推進したい人の材料にしてもらう」ことが自分にできることだと応じた。また、「配点が低いと生徒は情報を捨ててかかる。配点を上げるだけでも大きく違う」と、配点に込めるメッセージの重要性も議論された。

クロージング

最後に、本会理事（教育担当）の赤澤氏より閉会挨拶として総括が述べられた。世間では平均点や難易度が話題になりがちの中で出題の意図を直接聞いた貴重な機会であったこと、導入への思いから初年度の結果、入学後の成績評価、大規模実施の留意点まで各大学の多様な事例を共有できたことが振り返られた。また、自身が所属する電気通信大学では2026年度も個別入試で「情報」を出題し、受験生の約3分の1が「情報」を選択、昨年度を上回る500名以上が試験に挑んだことを「情報入試が受験生から評価され、受け入れられていることの証」として紹介した。そして、共通テストでより多くの受験生が「情報」を選択し、個別入試で「情報」を出題

する大学が広がることへの願いとともに、大学・高等学校・企業が連携して情報教育の在り方について考えを共有する場を今後も持ち続けたいと結ばれた。

広がる個別入試とこれから

共通テスト・個別入試とも初年度であった2025年度入試は「大学情報入試元年」ともいえる年であった²⁾。2年目には、本イベント企画で報告されたとおり、高知工科大学・立命館大学が個別入試で出題を開始し、京都産業大学は公募推薦入試にも「情報プラス型」を拡大、松山大学は2027年度入学者選抜からの導入を控えるなど、個別入試での「情報」出題は、情報系学部から文系学部を含む全学的な入試方式へと着実に広がっている。情報入試は、特別な取り組みから定着に向かっているといえる。

大学入学者選抜は、中等教育と高等教育をつなぐ高大接続の要の1つでもある。情報入試がうまく広がることで高校の情報教育がより良くなり、すべての人の情報活用能力向上につながることを、本会情報入試委員会は願っている。本会は今後も、共通テスト「情報」の問題解説の公開などを通じて、情報入試と情報教育の発展に貢献していきたい。

参考文献

- 1) 安田 豊, 小宮常康: 新課程「情報入試」最初の選抜を終えて, 情報処理, Vol.66, No.10, pp.456-460 (Oct. 2025).
- 2) 谷 聖一: 2025年度大学入学共通テストで「情報I」が実施されて, 情報処理, Vol.66, No.6, pp.258-263 (June 2025).

(2026年7月31日受付)

私感：共通テスト第I問・第II問で思うこと

- ・「要素技術」を問う時期は過ぎた
- ・情報処理システムとしての振る舞いを分析的に見ることを求めている
 - ・多数の構成要素に分解し、それらの相互連携を追える
 - ・その際に流れるデータの内容理解
- ・そうした「システム」設計の「合理性・妥当性」の評価を
 - ・要素技術の基礎的理解はそのためにある

図-8 安田豊氏のパネル討論事前準備資料の一部



谷 聖一（正会員） tani.seiichi@nihon-u.ac.jp

日本大学文理学部情報科学科教授。博士（理学）。計算論的位相幾何学や複雑ネットワーク解析などの研究、および、情報科学の普及活動に従事。コンピュータサイエンス領域功績賞（2018）、学会活動貢献賞（2026）。

訂 正

本誌 67 巻 11 号（2026 年 11 月号）の教育コーナー「ぺた語義」に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

p.481 右上

（誤）Vol.181

（正）Vol.182
